ハルネット（haru-net：春日井教育ネットワーク）の７年間

－ 誰もが活用するセンター集中型教育ネットワークをめざして －

愛知県春日井市立東部中学校　教頭　水谷　年孝
（愛知県春日井市情報教育特別委員会）
comp@kasugai.ed.jp
http://www.kasugai.ed.jp/

キーワード：センター集中型ネットワーク，校務活用，情報の共有化

１．はじめに

春日井教育ネットワーク(**ハルネット**:haru-net)は、市教委をセンターにして、市内の５３校をつないだ**集中管理型の教育ネットワーク**（行政ネットからは独立）で、平成１１年１０月に運用を開始したものです。当時、いくつかの先行都市の視察をしましたが、参考になる事例は少なく、手探り状態からのスタートでした。

当然のことですが、まずは、どんなことがやりたいのかを夜遅くまで、何度も議論し、図１のように**「誰でも」「いつでも」「どこでも」使えて、「自主的・主体的に学習できる」ネットワークシステム**を作りたいと考えました。また、教職員が、それぞれの立場で**教育情報**を**共有**し合うツールとして、使いやすいものにする必要があることも確認し合いました。この基本コンセプトがその後のシステム整備にずっと貫かれていることはハルネットの大きな特徴の一つです。

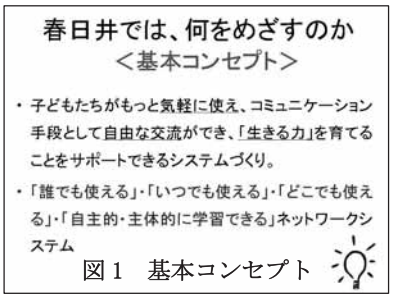

図１　基本コンセプト

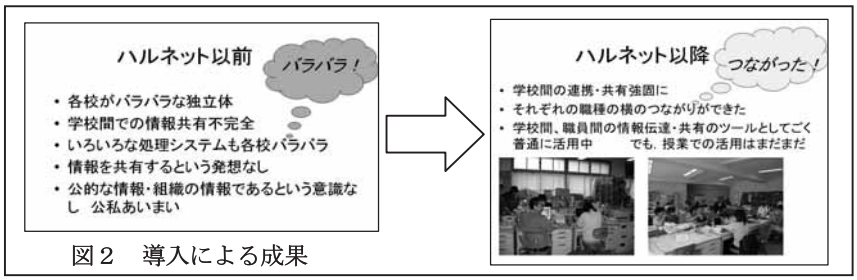

図２　導入による成果

各学校でシステムが整備されるにつれ、図２のように、校内での情報共有や、学校を越えた横のつながりもできてきました。ここまで大変な７年間でしたが、ハルネットを導入して本当に良かったと思います。しかし、授業での活用についてはまだ十分とは言えません。これからの大きな課題です。

さて、ここからは、「１　**横のつながり**」「２　**人・組織・チームワーク**」「３　**仕組みづくり**」の３つのキーワードで、ハルネットの７年間を説明します。

２．横のつながり「みんないっしょは安心だ」

ネットワークがハード的につながってパケットが流れれば、それでつながりはできるのでしょうか。「いいえ」、それだけでは無理です。線だけでなく、人がつながる方法が必要です。

そのために重視したことは「みんな同じ」です。**「どこに行っても基本はみんな同じ」**という環境をハルネットに作ったのです。例えば、データを保存するためのファイルサーバーのフォルダ構成も、基本的にはどの学校でもすべて同じにしました。他校に異動しても、どのジャンルの文書がどのフォルダに保存されているか容易に類推でき、前任者との**「情報の共有」**が自然にできます。これによって**「情報の共有化」**とそれを**「実行する動機」**が高まります。どこの学校でも通用するグローバルルールなら、学んで守っていこうという気になります。また、教師の共通作業である成績処理でも春日井専用の成績処理ソフトを自主開発し、市内の全中学校で利用しています。当然操作方法は同じなので、他校に異動しても、新しいソフトの操作やノウハウを改めて学ぶ必要はありません。これなら努力して身に付けた「スキル」が無駄にならないばかりか、お互いにノウハウを教え合ったりして、助け合って仕事ができます。つまり**「スキルの共有化」**です。コンピュータが苦手な人にとっても、このシステムならついてきてもらえます。

このような**「情報やスキルの共有化」**のメリットは、教職員に**「安心感」**をもたらすと言うことに尽きます。つながることで得られる安心感を知った教職員は、ハルネットをさらに使いやすくする工夫を生み出しました。その結果、市内イントラのＴＯＰページには、教材支援や校務支援などの便利なページがたくさん追加されました。また、校務分掌に応じたメーリングリストを活用した情報交換が活発になり、市内の教職員相互の結びつきも強くなりました。機械で結ばれたネットワークから人が結びついたネットワークが生み出されてきたのです。横につながるのは人です。

３．人・組織・チームワーク

センター方式のネットワークを推進することができた要因の一つに、２つの組織の存在があります。本市の情報教育関連の組織には、図３のように２つの委員会があります。特にハルネットを使う「**人とのかかわり**」をもつ**情報教育特別委員会**が、このネットワークをつくり上げてきた組織です。この情報教育特別委員会は、校長・教頭などの管

理職の他、教務主任や一般教員といった情報機器を日々の授業や校務に生かしたいと願う先生など、様々な立場の教職員で構成されています。中には、ＰＣショップ店員より機器に強い教職員もいます。

この委員会の活動は常に学校現場に密着しており、この７年間で、委員会を中心にした情報教育推進の輪が市内全体に大きく広がりました。例えば、委員会の校長や教頭が率先して自校のホームページ作りに取り組み、他校にも促しました。また、管理職同士の情報交換もメールの活用を促し、業務の情報化も推進することができました。また、学校図書館の情報化に取り組み、学習センターとしての機能強化を図る一方、養護教諭の保健統計の情報化や事務職員の業務の情報化にも取り組み、様々な業務の情報化を推し進めました。

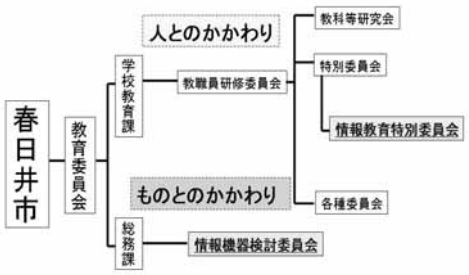

図３　情報教育推進のための組織

もう一つの特徴的なこととして、委員会の定例会議に、サポート業者も参加していることです。大規模なセンター集中型のネットワークをサポート業者の力なしで、運用していくことはできません。サポート業者の方には、われわれの思いや願いをミーティングの中で伝え、その実現のための技術的方法などを探ってもらいました。また、各学校のサポート状況の報告は、活用状況や問題点などの把握に役立ち、委員会としての対応を考える上で大変参考になるという利点もあります。

２つ目の**情報機器検討委員会**は、教育委員会が主催し、機器等の導入など「**ものとのかかわり**」について、学校現場の声を反映させた仕様を検討するための組織で、情報教育特別委員会から委員の一部が参加しています。

情報教育を推進するためには、学校と行政の連携がたいへん大切ですが、本市では行政の深い理解もあり、この２つの委員会がその重要な役割を果たしてきました。

４．誰でも気軽に活用する仕組みづくり

どんなにすばらしいシステムがあっても、本当の価値は使う人次第です。**誰もが気軽に利用できるハルネット**にするために、いろいろな手立てを講じてきましたが、ここでは特徴的な３つのことを紹介します。

１つ目は、全員にメールの魅力を紹介し活用を促したことです。ハルネット開設当初は、携帯のメールも今のようには普及していない時代なので、多くの教職員は「わざわざパソコンを開くよりもＦＡＸの方が早い」といった感覚でした。そんな時に、**全教職員にメールアドレス**を設定したことは、今考えてみると、英断だったと思います。また、特別委員会からハルネットの活用方法などをわかりやすく紹介する**メールを全教職員に毎日配信**しました。とにかくパソコンを開いて、メールの魅力を実感してもらうことがネットワーク活用への第一歩と考えたわけです。

また、「各学校の校長先生にメールを送りました。ご確認下さい。」こんなことを各学校向けの市内イントラ電子掲示板によく書き込みました。会議の開催案内がメールで送られるため、これを見逃したら大変です。こうしたことがきっかけになり、ワープロ専用機しか使っていなかった各校の管理職が、ネットワークを校内で最初に活用するようになったことは、大きな意味がありました。さらに、ちょうど総合的な学習の時間の試行が始まったこともあって、インターネットの活用も教職員の間で広がり、「ネットは教材の宝庫」という意識が定着しました。

このように、**ネットワークを活用せざるを得ない環境**をつくることが２つ目に考えた手立てです。成績処理や児童生徒の名簿管理、保健室統計、図書館貸出システムなど、市内統一のシステムを開発し、導入しました。また、職員全体の打合せを減らし、ネットワークによる連絡掲示板の活用を促したことなども、手法としては少々強引な面もありますが、結果的には、**業務の効率化や便利さを実感**してもらうことができ、今では良かったと思っています。

３つ目は、夏休みの研修事業の一環として取り組んできた「**教職員向けコンピュータ研修**」です。２０年以上も前から市内の先生方に講師になってもらい、ソフトの使い方や授業への活用などの講座を行い、スキルアップを図ってきました。情報教育特別委員会が現場の教職員の要望に応じて毎年企画・運営してきたことが大きな特徴です。

初心者向けのワープロ基本講座などは古くから人気がありましたが、ハルネットが導入されてからは、次第に初歩的な内容は不要になってきました。最近では「ホームページ作成」や「ＩＣＴによる授業支援」などをテーマにした講座に人気があります。**ハルネットを教育活動に積極的に生かしていこうとする雰囲気**が市内全体に広がっていることが、講座内容の変化にもあらわれています。このような**現場のニーズに合った研修会**の企画は、ハルネットを使う市内の教職員全体の底上げに大きく貢献してきたと考えています。

５．おわりに

７年経過して見えてきた成果と課題をまとめてみました。とにかくできることから無理をせずに取り組み、教職員主導で市内全体のボトムアップを図ってきました。毎年目標を決めて、見直しを重ね、現在も、少しずつ進化中です。いわゆるＰＤＣＡサイクルを無意識にやっていたのです。当然、失敗やトラブル、ハプニングの連続でしたが、１人１台パソコン、緊急メール配信システム、ＩＰファクシミリ、ネットワーク防犯カメラの導入など、すでにネットワークがあるから実現できたこともたくさんありました。現在は、ＴＶデジタル化にともなう番組配信を模索しています。ネットワークは生き物です。システムを整備しただけでは何もできません。ネットワークに自分・仕事を合わせるのではなく、ネットワークを自分・仕事に合わせて整備していくことが必要です。うまくいかないのが当たり前と思い、**気楽・気長に**取り組み、**使いやすく親しみやすいネットワークの構築**を目指すことが大切であると思います。